

「人質は脚本家」

石田真裕子

登場人物

小泉拓哉 (35) 脚本家

三枝誠 (60) 人質事件の犯人

小泉正孝 (65) 拓哉の父

小泉雅子 (65) 拓哉の母

小泉凜 (30) 拓哉の妹

小泉悠 (5) 凜の息子

新田学 (26) 警察官

石井進 (54) 警察官

鮫島音 (35) 拓哉の元恋人

石井祐樹 (23) 拓哉のバイト先の同僚

郵便局員
警察官

コンビニ客

○コンビニ・店内（夜）

客のいない深夜のコンビニ。

アルバイトの小泉拓哉（35）、石井

祐樹（23）、レジに横並びでぼーっ

と突っ立っている。

祐樹「暇っすね」

拓哉「ね」

祐樹「あ、小泉さんって、夢とかあります？」

拓哉「え、なに急に。こわい」

祐樹「俺、役者志望なんですけど、全っ然オ

ーディション受かんなくて。もう才能ない

のかなって、最近、心折れそうで……」

拓哉、面倒くさそうに。

拓哉「あー。もうそれは無理なんじゃない？」

祐樹「えーっー冷たいっすねえええ」

拓哉「あ、ごめん」

祐樹「100回無理でも、101回目は受かるかもって。やっぱ思うじゃないっすか」

拓哉、ふっと表情が曇って。

拓哉「100回も失敗してる人は、101回

目も無理だよ。それが現実。あれだよ？

ドリカムは10001回目だからね？」

祐樹「ああ。しかも、（節をつけて）変わるかも知れない、ですもんね？」

拓哉「そうだよ。かも知れないだけだよ。限りなく可能性はゼロに近い」

祐樹「はあ……。俺、親父の反対押し切って東京出てきたんで、成功するまでなかなか帰りづらくて……」

拓哉「石井君、どこ出身？」

祐樹「栃木です」

拓哉「わ、一緒だ」

祐樹「え、まじっすか？　なんか嬉しい！」

祐樹、ポケットに手を突っ込み、くちやくちやになったフライヤーを取り出し、拓哉に差し出す。

祐樹「今度一人芝居やるんで、よかったら見に来てください！」

フライヤーには、石井祐樹一人芝居

『101回目は受かるかも』、と。

拓哉、冷ややかな表情でフライヤーを
見つめて。

拓哉「うん、行けたら行く」

祐樹「お！ ありがとうございます！！」

拓哉「行けたらね？ 行けたら行く」

○拓哉の住むアパート・部屋（夜）

拓哉「ただいま」

拓哉、コンビニ弁当を手に帰宅。

一人暮らしのワンルーム。テレビも置
かれていない殺風景な部屋。

拓哉、部屋の真ん中に置かれた大きな
段ボールの上で弁当を食べ始める。

拓哉、ふと食べるのをやめ、テーブル
にしていた段ボールを眺める。

差出人は小泉雅子。実家からの荷物だ。

拓哉、段ボールを乱暴に開封。

中にはカップ麺や米などがたくさん。

拓哉、中に入っていた手紙を手取る。

『そろそろ帰ってきたら？ 偉大なる母より』と。

拓哉、うーんと大きく背伸びをして部屋の真ん中に大の字に寝転ぶ。

○小泉家・外観（夜）

田んぼに囲まれた田舎の大きな一軒家。

○小泉家・居間（夜）

大きな居間に、拓哉の妹・小泉凜（30）とその子供の悠（5）、拓哉の父

親・小泉正孝（65）、雅子（65）

そして拓哉。小泉家全員集合している。

居間の中央に置かれた長机には、唐揚

げ、お寿司、ステーキなど……わかり

やすいごちそうがたくさん。

凜「はい、じゃあみんなグラスもって」

各々、グラスを手に取る。

凜「それでは、お兄ちゃんの5年ぶりの帰省を祝して！ かんぱーい！」

各々、乾杯。

凜「お兄ちゃんも、今日から晴れてこどおじだね」

拓哉「なに、こどおじって？」

悠「子ども部屋おじさんのことだよ。いつまでも実家の子ども部屋に住み続けている自立できないおじさんのこと」

悠の達者な解説に圧倒される拓哉。

凜「悠くかしこいね」

拓哉「てか凜、離婚してたんだ」

凜「うん。あ、でもまだ1回目だよ？」

拓哉「（呆れて）0回が正解だよ」

正孝「悠、拓哉おじさんはね、プロの脚本家なんだよ？」

拓哉「違うよ。なれなくて、今こうして帰ってきてんの」

正孝「なったじゃん。『ルーザー』見てたよ。毎週楽しみに。ねえ？」

と、嬉しそうに雅子に話を振る。

雅子「お父さん、毎週録画して何回も見てた

もんね」

拓哉「もう5年も前の話」

凜「あれは本当にすごかった。民放ドラマ最低視聴率更新、奇跡の7話で打ち切り、ネットですべて叩かれて毎週逆にトレンド入り。もうお兄ちゃん、逆にすごいよあれは。お兄ちゃんがルーザーになっちゃってんじゃない」

と、豪快に笑う。

拓哉、凜をにらみつけ、唐揚げを口いっぱい頬張る。

正孝「すごいじゃない。オリジナル脚本が連続ドラマになったってだけで。お父さんは好きだったけどなあ。あ、今見る？」

と、リモコンを手取る。

拓哉、急いで止めて。

拓哉「だめ！絶対だめ！見なくていい！もう二度と見なくていい！！！」

正孝「……そう？」

と、残念そう。

雅子「で、まだ書くの？」

拓哉「書けたら書く」

雅子「あ、書かないやつだ」

拓哉、大きく背伸びをして。

拓哉「うーん。まあ別にもう、最悪書かなく
てもいいかな」

雅子「（何か言いたげに）ふーん」

拓哉「なに？」

雅子「お兄ちゃん、昔っからそう」

拓哉「なにが？」

雅子「ちよつと失敗すると、いつもそうなる」

拓哉「……」

○小泉家・拓哉の子ども部屋（夜）

拓哉が子ども部屋として使っていた部
屋。机やベッドなど、昔のまま。

拓哉、机の引き出しを開ける。

中にはたくさんさんのノート。表紙に『ド
ラマ名言集』と汚い字で書いてある。

拓哉、ページをめくりながら、

拓哉「やっぱり頑張らなきゃよかった」

と言いつつ読みふける。

○小泉家・居間（日、変わって）

居間に寝転び、ぼーっとしている拓哉。

そこに雅子がやってきて。

雅子「お兄ちゃん、ちよつと荷物送ってきて

くれない？」

拓哉「荷物？」

雅子「おばあちゃんに頼まれてたのよ」

と、大きな段ボールを差し出す。

拓哉「んー、あとでいい？」

と、面倒くさそう。

そこに凜がやってきて。

凜「本通りの郵便局で、音ちゃん働いてるよ」

もう玄関で靴を履いている拓哉。

凜「はやっ、きもっ」

拓哉「別に？　そういうんじゃないし」

拓哉、段ボールを抱え玄関を出ていく。

○交番

田舎町の交番。警察官の石井進（5

4）、新田学（26）、暇そうに座っている。

新田「暇ですね」

石井「まあ、いいことだけどね」

新田「あ、石井さん、あれ見てます？ 『逮

捕までの距離』」

石井「何それ。ドラマ？」

新田「はい。え、見てないんっすか？」

石井「うん。ドラマあんま見ない」

新田「あれマジおすすめっすよ。刑事ドラマと恋愛ドラマの奇跡の融合！ 超切ないんすよ」

石井「俺最後にドラマ見たのあれだな。あれ？ なんだっけ。思い出せない」

新田「『執行猶予の間にキス』？」

石井「違う」

新田「『刑事がいっぱい』？」

石井「違う。てかなにそのドラマ。ほんとに

ある？」

○郵便局・外

拓哉、段ボールを抱えて郵便局に到着。
郵便局の前で行ったり来たりしている
怪しい男がいる。三枝誠（60）だ。
拓哉、不審に思いながらも中に入る。

○郵便局・中

拓哉、入口で段ボールを抱えたままキ
ョロキョロして何かを探している。
するとそこに、先ほどの不審な男・三
枝が勢いよく入ってくる。
三枝、拓哉にぶつかり何かを落とす。

拓哉「す、すいません……」

三枝「あっ……」

拓哉、床に落ちたものを拾おうとする。
拳銃だ。

拓哉「え……」

驚いてフリーズする拓哉。

三枝、急いで拳銃を拾い、銃口を拓哉につきつける。

三枝「お、お、お、おい！ 手をあげる！」

三枝の声に驚き悲鳴をあげる局員や客たち。

拓哉、怯えながら言われるがまま手をあげる。

三枝「こ、こいつ以外、全員出る！ 今すぐここから出るおとおお！」

三枝、声が上ずっている。

拓哉「え、なんで俺……」

慌てて一目散に外へ出ていく人々。

拓哉「え、え、え……」

涙目の拓哉。

あつという間に、局内には拓哉と三枝の二人きりになる。

○交番

石井と新田、まだやってる。

新田「『エターナル家宅搜索』」

石井「違う」

新田「『あなたの人質になりたいくて』」

石井「違う」

すると二人のインカムに通信が。

男の声「人質事件発生。本通り郵便局で人質

事件発生。至急現場に向かってください」

石井、新田、驚いて顔を見合わせ、慌

てて準備して出ていく。

○郵便局・中

二人きりになった拓哉と三枝。

三枝、拳銃を下ろす。

三枝「あ、あの……」

拓哉「は、はい……」

三枝「手、もうおろして頂いて」

拓哉「あ、これ。はい。じゃあ……」

拓哉、ゆっくり手を下ろす。

三枝「あの……」

三枝、拓哉の目の前で突然土下座。

三枝「すいません！！！！」

拓哉「え？ え？」

困惑する拓哉。

三枝「こんなことに巻き込んでしまつて。ほんとに、すいません！！」

拓哉「ごめんなさい。ちよつと、状況がわからないんですけど……えつと……」

三枝「私、別に強盗とか、そういう目的じゃなくて……」

三枝、唇をかみしめて拳を握る。

三枝「ただ……娘にもう一度会いたいだけなんですううううううう！」

と、泣き崩れる。

拓哉「（困惑して）」

× × ×

三枝と拓哉、郵便局の待合ソファに並んで腰かけている。

拓哉「それで会社が倒産したと」

三枝「はい。借金も相当抱えました。で、し

ばらくは仕事もせず、毎日家で酒ばかり飲んで。そんな私に愛想つかした妻は、子供を連れて出ていきました」

拓哉「……」

三枝「もう何もかも嫌になって、死んでしまおうと何度も思いました。でもそのたびに、娘の顔が頭をよぎるんです。もう一度会いたい。娘にもう一度会うまでは死ねないって。そうやって自分を奮い立たせて、なんとか踏ん張って生きてきました」

三枝、しくしく泣き始める。

拓哉、ぎこちなく三枝の背中をさする。
三枝「娘は私のギターが大好きで、いつも目を輝かせて、パパ凄いつて拍手してくれて。色んな歌と一緒に歌いました。あの時の娘の顔が、今でも忘れられません……」

拓哉「娘さんは、この辺に住んでるんですか？」

三枝「わかりません。この土地は、3人で一

緒に住んでた場所なんです。もうあれから
30年以上経ってしまっています……」

拓哉、しんみりしている。

しかしふと考えて、

拓哉「ん？ え？」

三枝「？」

拓哉「すいません。ちよつとわからないんで
すけど……どうしてそれで立てこもり？」

三枝、嬉しそうに笑って。

三枝「この場所で目立つことしたら、気が付
いてくれるかなって」

拓哉、勢いよく首を横に振って。

拓哉「いやいやいや。それはさすがに無理
じゃないですか？ そもそももうここに住
んでない可能性の方が高いですよ？ 出
てってるわけだし。それにお互い、もう顔
も分からないでしょ？」

三枝「！」

拓哉「目立つこととして、ニュースになってっ

て、そういうことですか？ いやあくなんか絶対もつと他にいい方法あったでしょ」

三枝、はつとして。

三枝「はあくそうですよねえええ」

と、頭を抱えてしやがみ込む。

拓哉、呆れている。

拓哉「それに、万が一、仮に、数億分の一の確率で会えたとして。その時あなた、犯人ですよ？ 捕まっちゃってますよ？」

三枝、急に語気を強めて。

三枝「一度でも娘に会えるなら、私はそれでもかまいません！！」

拓哉「だめですって。もうやめましょう？

こんなこと。今からでも遅くないですから。間違えましたって謝って、許してもらいましょ？」

三枝、力強く首を横に振る。

三枝「『ルーザー』ってドラマ知ってます？」

拓哉、ぎよっとする。

三枝「何をやっても失敗ばかりの男が主人公

なんです。もうほんとに笑っちゃうくらい失敗ばかりの人生で。でもそのたびに前を向いて強くなってく……」

拓哉、表情が曇って。

拓哉「あの失敗したドラマですよ」

三枝「え、そうですか？」

拓哉「そうですよ。主人公が失敗しすぎ、見てて辛い、人生あんなに上手くいかない、一度失敗したら即終了でしょ……って。

散々ネットで叩かれました」

三枝「きびしい……」

拓哉「思ってる以上に、世間は失敗に厳しいんです」

三枝「世間って、インターネットですか」

拓哉「うーん……まあはい。そんなところです」

三枝「私は好きでしたけどね」

拓哉「……変わってますね」

三枝「家族に散々迷惑かけて、今さら会いたいなんて、そんなこと言えないって思ってたんですが……」

拓哉「ああ。あのドラマも、最後、家族に会いに行きますもんね」

三枝「はい。それで勇気をもらって。私ももう一度やり直せるんじゃないかって」

拓哉「…自分勝手」

三枝「え？」

拓哉「あ、すいません。そういうコメントもあつたなって、ネットに。あ、ドラマの話です」

三枝、少し考えて。

三枝「自分の人生ですから。少しだけ自分勝手でも、許してもらえないでしょうか」

拓哉「さあ…：どうでしょう」

少しの沈黙。

三枝「それにしてもお詳しいですね」

拓哉「え？」

三枝「『ルーザー』です。ネットがどうか。よく覚えてらっしゃる」

拓哉「ああ」

拓哉、少し考えた後。

拓哉「あれ、俺が書いたんです」

三枝「書いた？」

拓哉「脚本です。俺、脚本家なんです」

三枝「（驚いて）え？ え？ 本当に？」

拓哉、黙ってうなづく。

三枝、興奮していて。

三枝「え、すごい！ あ、そうでしたか。それはすごい……」

と、拓哉に握手を求める。

拓哉、気まずそうに握手。

三枝「すいません。そんな大先生を人質に」

拓哉「バカにしています？」

三枝「まさかそんな……」

拓哉「で、このあとのプランは？」

三枝「……わかりません」

拓哉「ノープランですか？」

三枝「はい……」

拓哉、呆れたという表情。

拓哉「やっぱりもうやめましょう……」

と、立ち上がり外に出ようとする。

三枝、突然拳銃を拓哉に突き付ける。

三枝「で、で、出ないでください！」

拓哉、びくつとして立ち止まる。

拓哉「それ、まさか本物じゃないですよ？」

三枝、天井に向かって1発銃弾を放つ。

バンッと銃声が鳴り響く。

三枝「本物です」

拓哉「……」

○郵便局・外

逃げ出してきた局員や客が遠くから心

配そうに中を見ている。

そこに石井と新田が到着。

石井「おい、まだ誰も来てないのか」

新田「田舎ですからね」

するとバンッと銃声が。

周囲から悲鳴があがる。

石井と新田、顔を見合わせる。

石井「ドラマじゃないからな」

新田「わかってます」

○郵便局・中

呆然としている拓哉。

拓哉「お、落ち着いてください」

三枝、思いついたというように。

三枝「わかった。脚本、書いてください」

拓哉「え？」

三枝「この事件の続き、脚本にしてください」

拓哉「いやいや、何言ってるんですか」

三枝、銃を拓哉に向ける。

拓哉、思わず手をあげる。

三枝「お願いします」

拓哉「そんなの無理ですって……」

三枝「どうしても娘にもう一度会いたいんで

す。ここからなんとか、一発逆転、娘に会

えるようなストーリーを考えて頂けないで

しょうか」

拓哉「滅茶苦茶言わないでください。それに、

もう書いてないんです、脚本」

三枝「どうして？」

拓哉「失敗したからですよ」

三枝「失敗？ 『ルーザー』ですか？」

拓哉「そうです。だから無理なんです。書けないんです。もう書けないんです」

三枝、静かに銃をさげて。

三枝「（つぶやくように）失敗してもやり直せばいいんじゃないですか？」

拓哉「え？」

三枝、もう一度銃を構える。

びくつと驚く拓哉。

三枝「やり直しましょう、一緒に」

拓哉「……」

三枝「やり直すか、死ぬか、どっちかです」

拓哉「……滅茶苦茶ですね」

三枝「はい。犯人なんで」

三枝、銃を構えたまま拓哉に近づいてくる。

拓哉、考えて、考えて、考えて、

拓哉「わ、わ、わかりました！ 書きます！
書くから！ 撃たないで！」

三枝、銃をおろす。

拓哉、ほっとしてその場に座り込む。

三枝「ありがとうございます！」

と、拓哉に向かって深くお辞儀。

拓哉、不満そうに三枝を睨む。

拓哉「じゃあ、とりあえずパソコン……」

拓哉、机に置かれているパソコンをいくつか触るが、どれもロックがかかっていて開かない。

拓哉「すいません。ちよつと一回外に出て、

誰でもいいんでどなたか郵便局の方を連れ

てきてもらってもいいですか？ パソコン、

ロックかかってて」

三枝「わかりました！」

三枝、嬉しそうに外に出ていく。

拓哉、三枝の背中を見送って。

拓哉「書けるかな……」

と不安そうにつぶやく。

○郵便局・外

石井と新田が銃を構えて警戒している。
そこに、銃を持った三枝が出てくる。

石井「きたぞ」

石井、新田、銃口を三枝に向ける。

三枝、気合を入れて声を張り上げる。

三枝「す、す、す、すいません！！！」

三枝、声が上がっている。

石井、新田、拍子抜けして顔を見合わせる。

三枝「どなたか、中のパソコンを貸してください。
さい。全部ロックがかかってて。パスワード
ドを教えてくださいさああああああい！」

石井、新田、戸惑いながら局員たちの
いる後方を振り返る。

一人の女性が力強く手を挙げている。

鮫島音（35）だ。

音「はい。私がいけます」

石井「いやでも……」

音「（三枝に向かって大声で）パソコン貸す

だけでいいんですよね？ そしたら帰って
いいんですよね？」

三枝「はい！ もちろんです！」

音「（石井に向かって）ほら、ああ言ってる
し」

石井「あんなの信じられないでしょ」

音「いや、なんか大丈夫な気がする。わかん
ないけど」

音、背筋をピンと伸ばし、ずかずかと
郵便局の中に入っていく。

三枝、そのあとに続いて中に入る。

○郵便局・中

そわそわしながら待っている拓哉。

そこに音と三枝がやってきて。

音「パソコン、一台でいいですか？」

三枝「あ、えっと……（拓哉に向かって）一
台で大丈夫ですか？」

音、拓哉に気づき驚く。

拓哉も音に気が付いて。

音「小泉くん？」

拓哉「鮫島さん？」

音「えー、びっくりなんだけど。え？ 小泉

くんが人質……ってこと？」

拓哉「えっと、まあ、うん。そういうこと、

だね」

音「なにそれ、びっくり」

拓哉「ね、俺もびっくり」

音「あ、久しぶり」

拓哉「う、うん。すごく久しぶり」

気まずそうな二人の様子に、気を使っ

てその場を離れる三枝。

音「元気そうだね」

拓哉「うん。鮫島さんも。変わってないね」

音「いや、さすがに変わってるよ。20年く

らい経ってるでしょ」

音、笑いながら自分のパソコンのロッ

クを解除する。

音「はい。これ」

拓哉「あ、うん。ありがとう」

音「なんでパソコン？」

拓哉「あの……まあちよつと、色々あって」

音「ふーん。あ、あれ見たよ、ドラマ」

拓哉「……え、見たの？」

音「見るでしょ。こつちじゃ有名人だよ、小

泉くん」

拓哉「なんか、ごめん……」

音「え、何のごめん？」

拓哉「わかんない。でもごめん」

音、笑って。

音「まあでも、私あのドラマ嫌いだった」

拓哉、ショックでふらつく。

音「私さ、あんまり失敗ばかりする人見てる

と腹立つんだよね」

拓哉「そ、そうなんだ……」

音「最初から失敗しないようにもつと計画的

にやれよ、失敗してもまたやり直せばいい

とか思ってるから失敗すんだよ、とか思っ

ちやう」

拓哉「（圧倒されて）おお……」

音「でもさ、最終回の主人公のやけくそなセリフ。あれはなんか好きだったな」

拓哉、驚いて音の顔を見る。

音「次も期待してる。応援してるね」

音、じゃあねと拓哉に手を振る。

左手の薬指に指輪が光っている。

音、出ていく。

拓哉、ふらふらとパソコンの前に座りうなだれる。

三枝、どこからか現れて。

三枝「お知り合い……でしたか？」

返答はない。

三枝「あのお、大丈夫ですか？」

拓哉のすすり泣く声。

拓哉「元カノです。人生で一番好きだった人です。あの恋が忘れられなくて全然新しい恋もできなくて……」

拓哉、突然勢いよく頭をあげる。

三枝、驚いて後ずさり。

何かスイッチが入った様子の拓哉。涙を拭い、パソコンでワードを立ち上げる。

拓哉「書ける書ける書ける書ける……！！」
ものすごい勢いでタイピングを始める
拓哉。

三枝、気を使ってその場を離れる。

○郵便局・外

石井、新田、相変わらず二人で銃を構えている。

石井「おい、県警まだか」

新田「田舎ですからね」

石井「最悪、今また犯人出てきたら、俺らが対応すんだよな？」

新田「任せてください」

石井「なんだよお前、経験ありか？」

新田「そうですね。大体1年で7〜8本は」

石井、少し考えて。

石井「それドラマだよ」

新田「はい」

不安そうな石井と、ちよつと楽しくな
ってきている新田。

○郵便局・中

相変わらずものすごい勢いでタイピン
グしている拓哉。目は血走っている。
ものすごい早さで（了）と書き終えた。

拓哉「よしっ！ おわった！！！！」

三枝、どこからともなく現れて。

三枝「お疲れ様です」

拓哉、脚本をプリントアウトして三枝
に渡す。

拓哉「じゃあさっそく」

三枝「はい。よろしくお願いします」

三枝、コピーした脚本を指差しながら
説明する。

拓哉「犯人って書いてあるところが全部、三
枝さんのセリフです」

三枝「全部？ 多いですね」

拓哉「はい。主役なんで」

三枝「主役ですか……」

三枝「ちよつと嬉しそう。」

拓哉「で、このセリフの間に書いてあるのは、ト書きって言って、犯人の動作とか心情とかを表してます」

三枝「この警察官ってのは」

拓哉「はい。もちろん本物の警察官です」

三枝「あ、じゃあこれ警察の方にも渡してきますね」

と、出ていこうとする。

拓哉、必死に止めて。

拓哉「ちがうちがうちがう。そしたらもうほんとにこれ、ただのドラマ」

三枝「あ、そっか」

拓哉「警察官のセリフは、俺のイメージです。ドラマとかで見た定番のセリフ書いてるだけなんで、もちろんこれの通りにはいかないと思います」

三枝「え、じゃあ、全然違うこと言われたら、

どうするんですか？」

拓哉「うーん。まあ細かいことは気にせず、このまま無理矢理いつちやうか、あとはアドリブ入れるかですね」

三枝「アドリブ……」

拓哉「アドリブ、入れたことありますか？」

三枝「（食い気味に）ないです」

拓哉「ですよね」

拓哉、苦笑い。

三枝、ちよつと不安そう。

拓哉「ま、とりあえずやってみましょう」

拓哉、プリントアウトした脚本にセロハンテープを付けて三枝に手渡す。

拓哉「これ、俺の背中に貼ってください」

三枝「背中？」

拓哉「はい。そしたら読みながら出来るですよ。ほら、後ろから俺のこと羽交い絞めにしてる風で」

と、ジェスチャーで説明。

三枝「ああ、ですね」

三枝、台本を貼り付ける。

拓哉「じゃあ、練習しましょう」

三枝「はい、よろしくお願いします」

○郵便局・外

銃を構えている石井、新田。

そこに、三枝と拓哉が打ち合わせ通りの体制で現れる。

石井「きたっ」

新田「きましたね。任せてください」

新田、少し前に出ていき、声を張り上げる。

新田「お前は完全に包囲されている！ そんなことをしてもお前のためにはならない！

早く人質を解放しなさい！」

石井、焦って新田に呼びかける。

石井「おい、全然包囲されてないだろ。二人だぞ？」

新田「いいんですよ、とりあえずこういうのは雰囲気です」

× × ×

声を張り上げている新田。

三枝、拓哉の背中に貼られた台本を目で追う。新田の言葉が、台本のセリフと全く一緒。

三枝、驚いて思わず拓哉の背中をつつく。

三枝「すごい、すごいです。一緒。一緒」

拓哉「え？ 一緒？」

三枝「はい。全部一緒。一字一句違わない」

拓哉「すげー！ それはさすがにすげー！」

× × ×

何やら盛り上がっている様子の拓哉と

三枝を不審そうに見る新田と石井。

新田「ん？ なんか楽しそうじゃないです

か？」

石井「気を抜くなよ。作戦かも知れない」

新田「ですね」

二人、体制を整え銃を構え直す。

× × ×

拓哉「次、犯人のセリフですよ」

三枝「はい。わかってます」

三枝、ものすごく緊張している。

三枝、ふーっと深呼吸をし、覚悟を決

めたように声を張り上げる。

三枝「うるさい！ 黙れ！ 俺は、ただ生き

別れた娘に会いたいただけなんだ！ 娘に会

うまでは人質は解放しない！」

× × ×

石井「生き別れた娘？ なんだそれ。そんな
のすぐ見つかる訳……」

新田、石井の言葉を制して。

新田「犯人にノーと言ってはいけません」

石井「そうなの？」

新田「はい。『刑事イエスマン』で言っ
てま
した」

石井、呆れたという顔。

新田、声を張り上げて。

新田「わかった！ 全力で探そう！ 名前

は？ 年齢は？ 分かっている限りの情報を全部教えてくれ！」

× × ×

拓哉「あ、断られる前提で書きちゃってるな」

三枝、気が付いてなくて。

三枝「うるさい黙れー！ 黙って俺の言う通りにしろ！」

三枝、ト書きに書かれている通り、拳銃を振り回して暴れるが、ぎこちなく、ロボットダンスみたいになっている。

× × ×

石井「なにあれ、踊ってる？ 踊ってるよ

ね？」

新田「聞こえてないのかなあ」

新田、もっと声を張り上げて。

新田「探すから！ 大丈夫だから！ 絶対見つけよう！ 協力する！」

× × ×

拓哉、焦って三枝に呼びかける。

拓哉「あの、探してくれるって言ってます、

警察の人。任せましようか？　もう任せちゃいましようか？」

三枝、興奮していて全然聞く耳持たず。

三枝「いいか、今から俺の言う通りにするんだ。俺のメッセージを動画に撮ってSNSで拡散しろ！　俺の、最愛の娘へのメッセージだ！」

その時、拓哉の背中に張り付けていた台本がひらりと落ちる。

三枝「あ、あ、あ、えっと……」

焦った三枝、何個か前の台詞と動作を繰り返す。

三枝「うるさい黙れー！　黙って俺の言う通りにしろー！」

三枝、再びのロボットダンス。

拓哉、慌てて台本を拾い、三枝を引きずって郵便局の中に戻っていく。

×　×　×

あっけにとられる石井と新田。

石井「おい、なんなんだよ」

新田「SNSで拡散して見つける、とか言うてましたよね最後」

石井「ああ。なんかあれだな、ドラマの見過ぎだな」

新田「犯人もドラマ好きっすかね」

石井「にしても、県警遅いな」

新田「田舎ですからね」

石井、怪訝な表情で新田を見つめて。

石井「ねえそれ、何かのドラマのやつ？ さつきからずつと言ってるやつ」

新田「あ、はい。『田舎刑事』の決め台詞です」

石井「好きだね、刑事ドラマ」

新田、にっこり笑って。

新田「はい。生きがいです」

○郵便局・中

拓哉と三枝、ドタバタと中へ。

拓哉「カットー！！」

三枝「ふー、緊張したああああ」

拓哉「ちよつと三枝さん、周り見えてないで
すね」

三枝「す、すいません……」

拓哉「警察の人、娘さん探すために協力して
くれるって言っていましたよ」

三枝「え？ そうなんですか？」

拓哉「ほら、全然聞いてない」

三枝「すいません……」

拓哉「どうします？ もう別にここで終わり
にして、お願いしちやっても……」

三枝、少し考えてどこかに消える。

拓哉「？」

三枝、ギターを持って登場。

拓哉「ギター？ え、いつのまに？」

三枝「この後の展開、気に入って……」

拓哉「ああ。メッセージ動画、ですか」

三枝「はい。ギター、弾いちゃおうかな、み
たいな」

拓哉「うわ、アドリブだ」

三枝「娘が好きだった曲歌いたくて。おぼえ

てるかなあ。いや、もうさすがに覚えてないかあ」

嬉しそうにギターをならす三枝。

拓哉、つられて思わず笑顔になる。

拓哉「なんか、楽しそうですね」

三枝「ああ、すいません。もしかしたら娘に会えるかもしれないって思ったら、それだけで嬉しくて……」

拓哉、少し言いづらそうに。

拓哉「……会えないと思います」

三枝、力なく笑って。

三枝「ですよね。なんとなく気づいてました」

拓哉「滅茶苦茶な脚本で、ごめんなさい」

三枝「いえ。楽しかったです。こんなダメ親

父が主人公の脚本を書いてもらえるなんて」

拓哉、少し考えて口を開く。

拓哉「俺、失敗するのが怖いんです」

三枝「そりゃあみんな怖いでしょ？」

拓哉「昔からなんでもそうでした。勉強でもスポーツでも、ちよっと失敗するとすぐ諦

めっちゃうんです。もっと失敗してもっと傷つく前に逃げちゃう。周りからどう思われるかとか凄いい気になるし、最初から頑張っていない振りして誤魔化したりして……」

三枝「……」

拓哉「でも脚本の仕事は大好きで。だから逃げてに頑張ろうってやってきたんですけど」

拓哉、うーんと大きく背伸びをする。

拓哉「やっぱり頑張らなければよかったかな」

三枝、ギターの裏に、綺麗に台本を貼り付けている。

三枝「あのドラマ、最後唐突に終わっちゃいましたよね」

拓哉「ああ、打ち切りだったから……」

三枝「最終回の主人公、やけくそでした」

拓哉「（苦笑い）」

三枝「でもそれが本音って感じで、好きでした」

拓哉「……」

三枝「インターネットのことはわかりません

が、少なくとも私は、三枝は、『ルーザー』に救われました。元気をもらいました」

三枝、ギターを手に立ち上がる。

いつになく頼もしい三枝の背中。

三枝「いきましよう。やけくそのファイナーレです」

ゆっくり歩いて出ていく三枝。

拓哉、三枝の背中を眩しそうに見つめながら、あとについて出ていく。

○郵便局・外

三枝、ギターを抱えて登場。

拓哉、そのあとについて出てくる。

石井「おい、またきたぞ」

新田「もはや拳銃もってないですね」

石井「もう確保するか？ しちやうか？」

新田、石井を制止して。

新田「いや、なんか最後まで応援したいです」

石井「うん、だな」

× × ×

拓哉、三枝の背中に向かって、

拓哉「三枝さん、頑張ってください」

三枝、無言でギターを天に掲げる。

三枝、ゆっくりと前に出ていく。

× × ×

三枝「おい！ お前ら！ スマホの準備をし
ろ！」

三枝、ここにきて犯人役が板について
きている。

新田、スマホを手に三枝の近くまで来
る。

三枝「いいか、今から俺のメッセージを動画
で撮ってSNSで拡散するんだ！」

新田、拳銃をしまい、スマホを構える。

新田「はい、準備できました！」

三枝「おっけい。じゃあいくぞ？」

新田、撮影開始。

三枝、ぽろんとギターをかき鳴らす。

三枝「音、元気ですか？」

拓哉「（独り言で）音……？」

三枝「お父さんは失敗ばかりのダメな人間でした。音とお母さんのこともたくさん傷つけた。情けない父親で本当にごめんなさい」
三枝、深く頭を下げる。

三枝「あれから30年。音のことを考えなかった日はありません。自分勝手にごめんなさい。でも音にもう一度会いたかったから。何度も自分を奮い立たせて、何度失敗しても起き上がって、今日まで生きてきました」

そこによくやく県警の特殊部隊が到着。
武装した警察官たちがぐるりと三枝を取り囲む。

気にせず続ける三枝。

三枝「音、愛してる。音はお父さんにとって、かけがえのない宝物です。音が好きだった歌を歌います。聞いてください！」

三枝、ギターを弾き、歌い始める。

曲ははっぴいえんど『風をあつめて』。

ざわつき始める警察官たち。

三枝、気持ちよさそうに歌っている。

(回想はじめ)

○三枝の住んでいたアパート

三枝(28)のギターに合わせて、娘の音(3)が楽しそうに『風をあつめて』をうたっている。

三枝「音、おうた上手だね」

音「パパもギターじょうず！」

三枝「大きくなったら一緒にギター弾こうね」

音「うん！ ひく！ やくそく！」

と、二人、指切りげんまん。

(回想おわり)

○郵便局・外

歌う三枝。

ぴゅーっと風が吹いて、ギターに張り付けていた台本が空に舞い上がる。空を見上げる一同。

風に吹かれた台本が、一人の女性の足元に落ちる。

台本を拾い上げる女性。震える手で台本をぐしゃつと握りつぶす。

背筋をピンと伸ばしずかずかと進んでくる女性。三枝の娘は、鮫島音だった。

音「うるさああああああい！！」

音の大声に驚き、演奏をやめる三枝。

三枝「……音、なのか？」

音「恥ずかしいことしてんじゃねえよ！　こっちはもうとつくに新しい人生生きてんだよ！　自分勝手すぎる。意味わかんない」

圧倒される三枝。

音、ぐちゃぐちゃになった台本を掲げ拓哉ににじみ寄り。

音「てゆーか、なに、さっきのクソダサイメッセージ。平成のメロドラマ？　なんなの？　ふざけてんの？」

圧倒される拓哉。

音「バカみたい。失敗ばかりで、お母さんに苦労ばかりかけて。なに綺麗ごと言ってるの？　なに美談にしようとしてんの？

失敗してもやり直せるなんてね、そんな甘
ったれた考え私は認めない！ 失敗したら
もう終わり！ そこで人生終了！ 二度と
私の前に現れるなー！」

怒りのままに怒鳴り散らす音。

拓哉、ふと三枝に顔を向ける。

三枝、おかしくなっていて。

三枝「はははははは……」

拓哉「さ、三枝さん……？」

三枝、おもむろに立ち上がり、拓哉を
羽交い絞めにして、拳銃を突きつける。

拓哉「え、え、え、三枝さん、ちよつと……」

台本にないですよ、そんなシーン」

三枝、号泣していて。

三枝「すいません。アドリブです。もう何も
かもうどうでもよくなりました。辛い、辛い
です。もう嫌だ。逃げたい。一緒に死にま
しょう」

拓哉「え、そんな……」

警察官たち、慌てて銃を構える。

三枝「くるなあああああ」

三枝、拳銃をさらに強く拓哉に突き付ける。

唾然とする拓哉。

取り囲む警察官たちの銃口が一斉に自分に向いているよう。

スローモーションのように感じられる時間の中で、

拓哉M「ああ、こんなバッドエンドの脚本が俺の遺作なんだ。最悪だよ。こんなことならもう一作くらい、やけくそでも書いときやよかった」

× × ×
(フラッシュユ)

郵便局で笑顔の音。

音「でもさ、最終回の主人公のやけくそなセリフ。あれは好きだったな」

× × ×
(フラッシュユ)

郵便局で笑顔の三枝。

三枝「最終回の主人公、やけくそでした」

三枝「でもそれが本音って感じで、好きでした」

× × ×

何か思いついた様子の拓哉。羽交い絞めにされたまま、声を張り上げる。

拓哉「失敗して逃げるじゃん。その方が楽しく思うじゃん。違うから、全然違うから！自分の失敗は、ずっつと自分についてくんの。消せないの。無かったことに出来ないの。むしろ辛い。逃げてる自分が情けなくて辛い！」

× × ×

石井、叫ぶ拓哉を見て、思い出したという顔で。

石井「あ、『ルーザー』だ」

新田「え？」

石井「ドラマ。俺が最後に見たドラマ」

新田「あの打ち切りになったやつですか？」

石井「そうそう。最終回なんて、主人公のセ

リフがもうやけくそでさ。もう脚本家の自分へのメッセージなんじゃないかっていう」

新田「へへ」

石井「でもそれがなんか、ちよつとかつこよかつたの」

と、拓哉を眩しそうに見つめる。

× × ×

拓哉「やり直すんだよ。失敗したって、何度だってやり直せばいいだけじゃん。この世で一番かつこいいのは、失敗した情けない自分を認めて前に進もうとしてる人なんだよ！ 100回失敗した人は、100回前に進もうとした人なんだよ！」

拓哉、拳を突き上げてカメラ視線で。

拓哉「他人の失敗つかまえて、鬼の首取ったみたいに騒ぎ立てるな！ やり直そうとしてる人のこといつまでも叩いて笑ってんじやねえ！ 失敗万歳！ 失敗最高！ 絶対もつと面白いドラマ作ってやるうううう！」

三枝、拓哉の叫びに驚き、思わず拳銃を落とす。

その瞬間、警察官が三枝を取り押さえる。

解放され、フラフラとよろめく拓哉。

別の警察官が拓哉を抱きかかえる。

放心状態の拓哉。

捕らえられた三枝の子どものような泣き声が響き渡る。

○郵便局・駐車場

手錠をかけられ、警察官に連れられパトカーに乗り込もうとしている三枝。

拓哉、その様子を見守っている。

そこに音がやってきて。

音「おい！」

三枝、驚いて立ち止まり振り返る。

音「あのさ……」

音、何を言おうか迷って。

音「私、あの歌まだ好きだよ」

三枝「！」

音「なんとなくだけど、覚えてる。一緒に歌ったの、ちゃんと、覚えてるから」

目に涙を浮かべ、何度も頷く三枝。

三枝、警察官に促され、パトカーに乗り込む。

パトカーが出発する。

パトカーに向かって手を振る音。

拓哉も隣で一緒に手を振る。

音の目に涙が光る。

拓哉、声を張り上げて。

拓哉「頑張れルーザー！」

音、拓哉に続いて。

音「負けるなルーザー！」

二人並んで、パトカーが見えなくなる

まで、手を振り続ける。

○コンビニ・店内（2週間後）（深夜）

人もまばらな深夜のコンビニ。

拓哉と祐樹、レジに横並びでぼーっと
突っ立っている。

祐樹「暇っすね」

拓哉「ね」

祐樹「小泉さん、実家帰ったんじゃないか
んすか」

拓哉「ああ、うん。帰るのやめた」

祐樹「そういえば最近、超久しぶりに父親か
らメール来て」

拓哉「なんて？」

祐樹、拓哉にメールの画面を見せなが
ら、

祐樹「この世で一番かっこいいのは、失敗し
た情けない自分を認めて前に進もうとして
る人なんだよ！って」

拓哉、驚いて祐樹を見る。

祐樹「急にびっくりですよね。なんかドラマ
のセリフ？ みたいで」

拓哉「ねえ、石井君のお父さんって何してる
人？」

祐樹「あ、警察官っす。栃木の田舎の交番勤務ですけどね」

拓哉「（驚いて）へえ……」

祐樹「でも俺、もうちよつと頑張ってみようかなって思っちゃいました。……無理っすかね？」

拓哉、少し考えて。

拓哉「無理じゃないんじゃない？」

祐樹「え？ 今日には優しいっすね」

拓哉「100回も失敗出来た人は、100回も前に進もうとした人だから」

祐樹、驚いて拓哉を見る。

祐樹「それもなんかのセリフですか」

祐樹「さあ、どうだろう」

祐樹「101回目の奇跡、起こりますかね？」

拓哉「うん、起こるかもね」

嬉しそうな祐樹。

拓哉も嬉しそうに笑う。

客がスポーツ新聞を手レジにやってくる。

拓哉「いらつしやいませ」

レジに置かれたスポーツ新聞、裏面の
小さな記事の見出しに……

T 『人質は脚本家』

(了)